

存知の方も多かもしれませんが、阿蘇はさまざまな小説の舞台として描かれてきました。かの文豪、夏目漱石をはじめ、著名な作家たちが阿蘇を舞台に多くの作品を残しています。また、阿蘇独自の自然や文化について触れた本も多数出版されています。

今回は、「阿蘇にまつわるオススメ本」と題して、それらの作品をご紹介します。わたしたちの故郷を今までとは違った視点で再発見できるかもしれません？！

では、新たな“阿蘇”の魅力を再発見していきましょう。

貸出場所情報



=阿蘇図書館



=一の宮図書館

※貸し出し中の場合もありますのでご了承ください。事前にご連絡いただければ最寄りの図書館で受け取ることもできます。

1

阿蘇の旅路つづった漱石の代表作

二百十日



◎夏目漱石

作家・夏目漱石は、野口英世以前に“千円札の人”だったこともあり、顔をご存知の方も多はず。彼は、第五高等学校（現在の熊本大学）で英語教師として教鞭をとっていました。熊本に住んだのは、4年3ヶ月と短い期間でしたが、その後に発表された「草枕」「二百十日」に印象的な熊本を描いています。

特に「二百十日」は、阿蘇登山を舞台とした作品で明治32年に彼が同僚の山川信次郎と阿蘇を旅したことが素材となっています。この旅で、漱石は内牧温泉に泊まり、阿蘇神社を訪れ、その後中岳を目指しています。また、漱石は熊本時代に約千句もの俳句を作ったとされています。阿蘇の原野を詠った俳句『行けど萩 行けど薄の原広し』は有名です。

ことしは、漱石が来熊して120年。当時、漱石が描いた阿蘇の人や風景に思いを馳せてみてはいかがでしょうか？



4



阿蘇殺人ルート

◎西村京太郎

警視庁に「火の国」で殺人が起こると投書してきた井上正剛が殺害された。彼の予告通り九州を走る「火の山4号」で中西浩司が刺殺される。井上と中西を結ぶ線上に疑惑の人物、神保ユキが浮かぶが、彼女には鉄壁のアリバイがあった。九州の秘境、由布院と阿蘇高原を舞台に展開する連続殺人。十津川警部シリーズは他にも阿蘇を舞台にするものがあります。カウンターでお尋ねください。



3



喪失 一ある殺意のゆくえ

◎夏樹静子

九州テレビ放送でディレクターを勤める杉原淳子、29歳。そろそろ婚期を過ぎようとする彼女は、ふとした行きがちいで出会った男に、身をまかせてしまう。それきり消息を絶った男に、想いをつのらせる淳子は、ゆくえを捜しはじめるが…。九州各地を舞台に、ひとりの女性が抱く幻影を活写。主人公が事件現場である南郷谷へ調査に訪れるシーンがあります。



2



山峡の章

◎松本清張

耶馬溪と阿蘇を旅する主人公は、旅行中に会った官僚と結婚するが、結婚生活に違和感を持ち始める。そして、結婚生活は、夫と妹の失踪という形で突然の終止符をうつ。信じられない主人公は、真実を究明するため動き出す。文中に“阿蘇では野牛に追いかけられました”というセリフがあります。思わず「そんな馬鹿な！」と叫びたくなりますね。





図書館に興味のある方は、こちらのQRコードで
今すぐホームページへGO!

図書館から市民の皆さんへ

- 阿蘇郡市内で図書館があるのは阿蘇市だけ!
- 図書館の本やDVD・CD・雑誌は無料で借りられます!
- 阿蘇市立図書館ホームページから本の検索や予約もできます!
- 小さいお子さんからお年寄りまですべての人が利用できる数少ない公共施設です!

開館時間 (火~金) 9:00 ~ 18:00 (土・日) 9:00 ~ 17:00

休館日 毎週月曜日、月末日、祝日など

※詳しくは図書館にお尋ねください。

図阿蘇図書館 ☎ 32-0067 ※お知らせ端末からでもOK

図一の宮図書館 ☎ 22-2916

7



隅の風景

著 恩田陸

本屋大賞「夜のピクニック」の恩田陸が贈る紀行集。要は恩田陸が旅先での体験談をまとめた本です。注目すべきは、「阿蘇酒池肉林」と題された一章。熊本・阿蘇を訪れた作者はとにかく肉ばかり食べている。文章を読んでもらえばわかると思うのですが、テンポがあり描写も細かく痛快! 驚くのは、作者は取材メモをとることはほとんどしないらしい。まったく見事です!

6



幻化

著 梅崎春生

戦後派文学の旗手、梅崎春生の遺作に阿蘇山が登場する。梅崎は海軍の体験を基にした『桜島』、また後に『幻化』を執筆、前篇発表後に50歳の若さで亡くなる。死後、後篇が発表されました。消え去った記憶を確かめようと南九州を旅する精神病の男を通して、20数年間の心象風景を文学へと結晶させた、戦後文学屈指の名作。主人公の最後の舞台が阿蘇山の火口です。

5



黄泉がえり

著 梶尾真治

2003年に公開された映画『黄泉がえり』の原作本であり、著者は熊本市出身の作家梶尾真治です。原作の舞台は熊本市界隈で、映画化の際に舞台設定が阿蘇に変更されました。映画「黄泉がえり」は、女性中心に人気を博しました。熊本市出身の作家ゆえに地名などの描写は詳細であり、物語に馴染みやすい作品です。

10



鬼八

文 竹崎有斐 絵 福田庄助

昭和58年に出版された絵本。作者は熊本県出身の児童文学作家・竹崎有斐。この作品は、阿蘇・高千穂に残る鬼八伝説を再構成したものとされている。作者は、伝説では鬼八を凶賊と伝えているだけだが、それはあまりにも哀れで、命(みこと)と鬼八を対等に扱いたかったと述べている。霜神社の火焚き神事にまつわる鬼八伝説は、多くの神話や伝説が残る“阿蘇”の地の再発見への一歩となるでしょう。

9



阿蘇神社

編 阿蘇神社第91代宮司阿蘇惟之

一の宮の地名は、阿蘇神社が肥後国一の宮と称されたことに由来する。また、宮地はその一体が阿蘇神社の神域であったことから起こった。阿蘇を語る上で、阿蘇神社を知ることには始まりを知ることにつながる。阿蘇神社に関する本は多く出版されていますが、その中でも阿蘇に興味がある方におすすめの一冊です。私たちの身近に存在する阿蘇神社の本当の姿を知ることができるでしょう。

8



草原が危ない

出版 熊本日日新聞社

本書は、熊本日日新聞が2010年11月から2012年6月まで連載した「草原が危ない」と関連特集を収録。連載直後に阿蘇を襲った7・12豪雨災害後の動きを追加取材したもの。目次の次のページには未来からの警鐘として架空の熊日日新聞の紙面が登場しています。見出しは「阿蘇世界遺産から抹消! わたしたちの故郷には類まれな文化と自然がある。阿蘇に生まれ、育ったわたしたちが知っておくべき現実と真実。」



●大倉靖萌さんが読んだ本

ダイヤモンドより平和がほしい

後藤健二／著(汐文社)

アフリカの西部に位置するシエラレオネ。ダイヤモンドの産地として知られるが、その利益は戦争の費用となり、武器にかえられ、そして、その銃を子どもも握ったのだ…。「やぶの殺し屋」と呼ばれていた元・子ども兵士を取材。

「ダイヤモンドより平和がほしい」を読んで

阿蘇小6年 大倉靖萌

「後藤健二さん・湯川遙菜さん人質事件。」日本人が外国で殺害されたこの事件にぼくはショックを受けました。「外国で起きていることを知らなければならぬ。」そんな思いでぼくはこの本を手に取りました。この本の舞台であるシエラレオネは、まぶしいほどすき通った質の良いダイヤモンドの産地です。しかし、その輝きとは裏腹に、十年近く激しい内戦が続いています。内戦の資金源となっていたのは、なんとダイヤモンドでした。ダイヤモンドを売ったお金で武器が買われ、たくさんのお金が奪われました。ダイヤモンドを買った人は、自分のお金が戦争に使われるとは思いませんでした。知らないうちに戦争に巻き込まれていました。とても怖いと感じました。そして、この事実に関心ではいけないと思いました。

第11回

読書感想文コンクール

市長賞 作品紹介

読書で感じた思いを、ありのままに。

内戦が続いていたころのシエラレオネの人々の平均寿命は、男性が約三十二歳、女性が約三十五歳。世界で最も平均寿命が短い国になってしまいました。同じ時期の日本の平均寿命は、男性が約七十八歳、女性が約八十五歳。国が違うだけでこんなにも違います。日本に生まれたぼくは幸運で、シエラレオネに生まれた人は不運。そんなことがあつてはならないと思います。とても深刻で難しい問題ですが、世界中のすべての人が安心して生きていくために、どうすれば戦争が無くなるかを考えていかなければなりません。

この本に登場するサクバーさんは、内戦で両耳と右腕を失いました。サクバーさんを襲ったのは「子ども兵士」と呼ばれる十歳前後の子どもの達の集団でした。リーダーは十二歳。僕と同じ年齢です。彼らは無差別に銃を撃ち、人の手足を切り落とし、耳をそぎました。ぼくには全く想像できない光景です。なぜ子どもがそんなことをできるのか。同じくらしいの年なのに全く理解ができませんでした。

サクバーさんは襲われた後、傷を負ったまま、手当もせずに丸四日間逃げ続けました。サクバーさんの生きようとする姿勢に強く心を打たれました。サクバーさんはどんな思いで逃げ続けたのでしょうか。もしぼくがサクバーさんの立場だったら、子ども兵士に対する怒りや憎しみでいっぱいになるでしょう。しかし、サクバーさんは違っていました。彼は、自分達を襲った子ども兵士を「許そうと思え。」と語ったのです。自分の右腕や両耳を切った相手を許そうというのです。この発言にぼくはおどろきました。なぜ許せるのだろうか。と疑問でした。しかし、「平和になるために彼らを許しました。」というサクバーさんの言葉に納得しました。



●園田桃子さんが読んだ本

ドリームボックス —殺されてゆくペットたち

小林照幸／著(毎日新聞社)

「助けてください!」「私をもらってください!」ペットブームの裏側で、年間およそ40万頭の犬猫が見捨てられ、「ドリームボックス」と呼ばれる殺処装置に送られている。「ペット大国」ニッポンの現実を描く。

た。確かに、許すことができず、仕返しを考えるならば、憎しみはまた新たな戦争を生むのです。サクバーさんは「戦争を終わらせたい」という強い思いから、許すという段階まで行き着いたのだと思います。

サクバーさんと同じように平和を強く願う人がいます。それは、「やぶの殺し屋」と呼ばれた元子ども兵士のムリアです。彼が十二歳の時、村が襲われ、目の前で両親を殺されました。自分の身を守るために、彼は子ども兵士にならざるをえませんでした。彼の左目の下にある傷は、その時に麻薬を入られたもの。大人達が子どもを戦闘マシーンにするために麻薬を使っていたのです。ムリアのような子ども兵士もこの戦争の被害者なのです。

自分の命がいつ奪われるかわからない悪夢のような日々から逃げ出すために、ムリアは真暗なジャングルの中を一晚中歩き続け、カトリック教会の施設に保護されました。麻薬の禁断症

状に苦しむムリアに、施設スタッフは二十四時間付きそいました。彼は、ここでみんなと食事をし、テレビを見、ねむりました。普通の生活を送る中で、自分の過去と正面から向き合い、「やぶの殺し屋」と呼ばれていた時の自分を乗り越え、次第に自分の夢を語る事ができるようになりました。今、ムリアは新しい自分に生まれ変わるために勉強をしています。シエラレオネの大統領になって、この国の平和を守ることが彼の夢です。戦争は、人の人生をこわし、人が夢を見る力までもこわすものです。そして、戦争のない国で、普通の生活を送ることがいかに人間にとって欠かせないものか。この本を読んでよく分かりました。

日本は戦後七十年間平和を保ち、豊かな国となりました。ぼくが大人になる頃、日本はどうなっているのでしょうか。ぼくは、みんなの命を無駄にしたくありません。「戦争をしない」という「カタチ」で平和を保ってきた日本には、世界平和の実

現のためにできることがあるはず。そしてぼくは日本人です。世界中の人々が願う平和。その実現のためにできることは何なのか。少しでもできることはないか。問い続けていきたいです。

審査講評

学年にふさわしい適切な本の選択と、自分の考えを持ったしつかりとした読みができています。そのことで、読書によって得られた自己改革や、きちんとした自己主張を感想の随所に見ることができます。構成や表現も優れていて完成度の高い感想文で、市長賞にふさわしい作品といえます。

明日を守る責任

一の宮中2年 園田桃子

辞典で「ドリーム」と調べると、夢や希望といった意味が出てくる。では、「ドリームボックス」と名づけられた炭酸ガスで殺処分を行う装置には、夢や希望は

あるのだろうか。

私がこの本を手にとった理由は題名にある。図書館で読書感想文の本を探していたとき、「ドリームボックス」という文字が目に入ってきた。私は最初、「ドリーム」とついていたら楽しい内容かと思いきや、本棚から取り出した。しかし、次に私の目に入ってきたのは「殺されてゆくペットたち」という文字だった。なぜ正反對の言葉が題名にあるのか疑問に思い、この本を読むことにした。

獣医師の史朗は、県動物愛護センターで働いている。史朗の仕事は、もう飼えないと引き取られたり、野放しになったりしていた犬や猫を殺処分するというものだ。私はこの事実を知った時、すぐには信じられなかった。私が持つ動物愛護のイメージは、ケガした動物を保護し、完治させて自然に帰すというもので、一言でいうと「命をつなぐ」仕事だと思っていた。しかし、この本に書かれている事実はイメージとは全く違うものだった。日本のすべての

●佐藤まひるさんが読んだ本

奇跡のリンゴ —「絶対不可能」を覆した農家 木村秋則の記録 石川拓治／著(幻冬舎)



農薬も肥料も使わずに、たわわりにりんごを実らせる農家。ニュートンよりも、ライト兄弟よりも偉大な奇跡を成し遂げた男の、長く壮絶な闘いの記録。

都道府県に殺処分を行う施設があり、二〇〇四年度には、全国で年間約三十九万匹の犬や猫を殺処分している。なぜ、これほどまでに動物の命を奪わなければならないのか。その原因を作っているのは、私たち人間だ。この本の中で印象に残った話がある。ある日、史朗のもとに犬を返してほしいという家族が訪れた。動物愛護センターでは、殺処分までに五日間時間があり、返還を申し出ることができると。私は、この犬は助かって良かったとほっとした。飼い主を見つけた雑種の犬はしつぱをふって喜んでいった。ところが、「どうせならグルメシアンをもらおうよ。」と母親が言い出した。史朗がそれはできない。このままだと雑種の犬は処分されると言う、「数字の上では、どっちが殺されても同じじゃない。」

と言いつつ、結局引き取らずに帰っていった。私はずも腹が立った。犬も人間も変わらない命なのに、軽く扱っていたからだ。でも、実際に対応した史朗は、

もつと腹が立ったと思う。「この犬たちすべてに飼い主、家族がいた。」もし、その飼い主、家族たちが犬や猫を捨てることなく、最期の時まで一緒に過ごしたなら、動物愛護センターやドリームボックスは必要ないのだと思う。先ほど、原因は人間だと書いたが、私は責任を持つ心が足りていないのだと思う。犬や猫は言葉が話すことができない。だからといって、人間の自分勝手な行動に巻きこんではいけないと思う。自分の家族として犬や猫を受け入れ、愛情を注いで一緒に過ごすことこそが「責任」だと私は考える。

私の将来の夢は、獣医になることだ。もしかすると、動物愛護センターで働くことがあるかもしれない。しかし、どこで働くことになっても、動物たちを思いやる、そして命を大切にすることを獣医になりたいと思う。動物たちの明日は、私たちの手にかかっている。

審査講評

読みとつた内容と感想とが整然と述べられていきます。動物をいたわることの本来の意味を考え、それを自身の将来への希望にもつないでいて、広がりのある立派な感想文になっています。桃子さんは、小学生の頃から、かなりの読書家とお見受けします。これからも、より高い思考力を練るために分野を広げて読書が続けて欲しいものです。

「奇跡のリンゴ」を読んで

阿蘇中央高校1年

佐藤まひる

この本を読むきっかけとなったのは、リンゴが好きで私が、たまたま本だなから見つけ、「奇跡のリンゴ」とは、一体どういうものだろう。」という興味からです。「絶対不可能」というサブタイトルの意味を考えながら読んでみると、この本の主人公、木村秋則さんの壮絶な過去の中にその答えはありました。

無農薬という言葉は誰もが知っていますが、木村さんは初めて無農薬のリンゴを実らせることに成功した人です。世の中には少しずつ無農薬の作物が出回っており、リンゴも不可能ではないのではないかと思う人もきつというと思います。しかし、リンゴは無農薬にすると、収穫が減るところでなく、ほぼ壊滅的になってしまふのです。品種改良を重ね、甘く大きくなったリンゴは虫たちの格好のえさになってしまいます。農薬が使われたその年から、生態系は少しずつでも確実に壊れていき、農薬なしでは病気にもかかりやすくなっています。リンゴ農家の人たちはそれを知っているがゆえに無農薬リンゴの栽培を始めた木村さんを遠ざけるようになりました。悪口を言われ、それでも、あきらめずひたすら自分自身を信じて頑張っていました。その努力が報われ、約十年をかけた末にようやくその夢が叶う、という話です。

絶対不可能といわれたそ

●第11回 阿蘇市読書感想文コンクール

11回目を迎えた阿蘇市読書感想文コンクールは、全72作品の応募をいただきました。今回も優れた作品が寄せられ、紹介した市長賞の3作品以外に11点の作品が入賞を果たしました。今回は、残念ながら一般の部(一般社会人、大学生など)の応募がありませんでしたので、ぜひ次回には社会人の皆さんの素晴らしい作品をお寄せください。

の夢を可能にするのはとても難しいと思います。私が想像した以上に大変だったというのが、この本から十分に伝わってきました。私はそれほどまでの強い信念に心を打たれました。私にはまだ、そこまでつき進むだけの信念や夢はありません。「無理だ」と言われると、どうしても尻込みしてしまいます。新しいことに挑戦するのは、まだまだ自信のない自分にとって不安になってしまいます。ただ、この本を読んで思ったことは、変わりたい気持ちと、木村さんへの憧れです。一度挫折を味わった人たちは、その経験があったからこそ何事にもとても一生懸命で、輝いて見えます。人の目がどうしても気になってしまふ私は、自分を信じ切れるくらいの勇気が欲しいなと思います。

ことに気づけた時、心臓の高鳴りがおさまらなくなつた、というような場面がありました。その場面は、私も何だかわくわくしながら読んでいました。身近にある物に例えるなら、テレビ番組での謎解きなどで、ここまで出ているのに、もう少しのところで答えにたどりつかずにもやもやして、あきらめようとするふと身近にあるヒントに気づき、答えにたどりついた、というときの嬉しさだと思います。ああ、苦勞が報われた、とその時木村さんが感じたことが自分のことのように感じる事ができました。

ともできました。砂漠化が森林伐採によって進んでいき、農業で生態系が壊れてしまう。そんな中木村さんの作る食物はどれも自然のお手伝いをして、その恵みを分けてもらう、というように自然に折り合いのつけないやり方を見つけ、自然のお手伝いを淡々と続けている。こんなに食べ物に心からありがたみを感じている人はほんの少しなので、と思います。農業のあべき姿が書かれており、そのことに気がつくことのできた不可能への挑戦は、くじけるようなことの連続でも、あきらめなかつたからこそ、私の心に響いたんだな、と思います。

自身を見つめ直し、とにかく何事にもチャレンジしていく勇氣を持つようになりたいです。

審査講評

言うまでもなく本は言葉で書かれています。でも、読む人がいなければただの「置物」ですし、読むにしても、その一行一行に「想像力」を注いだ時にしか命が宿らない「生き物」のようなものです。そういう点から、まひるさんは、本の著者木村さんになりきり、一緒にりんご作りをやっています。汗を流し、苦しみや喜びを分かち合っています。

【読書感想文に関する問い合わせ】
阿蘇図書館 ☎ 32-0067